

二葉亭四迷

露都雜記

露
都
雜
記

一

ネミローウイチ、ダンチエンコ氏が日本のさる田舎の
ステーション
停車場で、何心なく汽車の窓から首を出すと、そこの柵
外に遊んで居た洩垂らしの頑童共が、思いがけず異人馬
鹿と手を拍うって囃はやしたので、氏は驚いて首を引込めた事
がある。それからはこの「異人馬鹿」が耳に附いて、京
都の秀麗な山河に対しても、宮島の美景を望んでも、之
を想い出すと、一種の苦い感じが夕立雲の空に拡がる如

く急に心頭に掩おおいかぶさつて、折角の感興も之が為に台なしにされたとかで、氏は直たちに之を日本人の排外思想と見倣みなし、日本に可惜疵あたらきずの随一に算かぞえていられる。

その事はルースコエ、スローウオに連載された氏の紀行にも出たので、当地の各新聞は珍ちよつとらしい事にして皆其の一節を転載する、それで一時一寸之が評判になつて、逢う人が皆其の事を言い出すので、僕はお蔭でうるさい想おもをさせられた。

ダンチエンコ氏は田舎の停車場で子供に調戯からかわれたのだが、此の頃のノーウオエ、ウレーミヤを見ると、去年の

天長節に東京の真中で、しかも大学生に異人馬鹿といわれた露西亞人がある。それはこの新聞の通信員でH.I.J. という男である、余り不思議の話だから、念の為其通信の一節を左に抄訳する。

群集に誘われて余等（独逸人某と此の通信員とだ）も前へと進んだ、行けば行く程人気はたつみ上って、其処にも此処にも万歳の声が聞え、狼烟のろしがしつきりなく上る、と数名の大学生が人浪を押分けつつ、余等の側を通りぬげんとして、無作法に余等の面かおを眺めて、「異人馬鹿！」と叫んだ。其処らの者一同之に声を合せて

動揺^{どよ}めく。

明治四十一年の大学生が外国人を呼んで異人といったとは、古今の珍聞というべしだ。が、珍聞はこればかりでなく、此の通信員が旗行列か何かの跡について行くと、皆「万歳（御名）！」と叫んだという、グード、モーニング、ジャ、リットルジョンの格だが、ウラー、ニコライとは此方^{こつち}でも聞かぬ事で、これも古今の珍聞だ。

概して此の通信は珍聞に富んでいる、いや、珍聞だらけでうっかり足を踏込むと珍聞を踏ンづける程だが、其の中で珍の珍たるものは、大方此の旗行列は戦勝の名誉

を表彰する神社などへ行く事だろうと思つて跡について
 行くと、吉原という処へ来たとある。文章の続柄そうよ
 り外ほかには取れぬ、で、吉原の景氣を叙するあたりにも大
 分珍聞もあるが、それは省略して、此通信員連つれの独逸人
 とトある格子先こうしに立つた……とは書いてないが、立つた
 に違いない。すると妓夫ではなくて此の家の亭主が側へ
 来て、文明な露国ではとても聞かれぬ尾陋びろう千万な事を野
 蛮な日本人だから平気で陳べて遊興を勧める。それを通
 弁に取次がせて聴いていると、恰あたかも此の時丁度その格
 子先の往来で大道演説が始まった、弁士が入替り立替り

愛国心を鼓舞したので、万歳と異人馬鹿の叫び声は次第に烈しくなり、遂に一同ちぐはぐの声で歌い出すのを聴くと、

「ニポン、カタ。

ラシヤ、マキタ」

通信員は事実有つたに相違ない此の事実の意味を説明して、之はミカドの生誕日を祝する為貴賤を挙こぞつて此処に集つた東京の住民が、日本の輸出品中最も売行の好い代物しろものを眼前に見て意気頓とみに揚りそこで愛国的演説をはじめ、外国人を罵ば詈りし、日本の光榮ある将来に望を属した

のである、といっている。事実が既に珍無類だから、説明も亦珍また無類である。で、その次にかうある——
 「皇帝の誕生日は今歳は東京ではかうして祝されたのである。」

是ここに於て余は独逸人に一問を足した、若し伯林ベルリンでカイゼルの命名日に、何人かかかる処で愛国的示威運動を企てたら、独逸の警察や社会は果して之を何というであらうかと。

流石日本ひいき眞員ひいきの独逸人も此の時ばかりは啞然として答うる所を知らなかつた。」

ノーウオエ、ウレーミヤの社中には常識に富む紳士も
少くない。その堂々たるノーウオエ、ウレーミヤがこう、
いう通信員のこう、いう通信を平気で掲載する真意は僕も
知らんが、しかしこう、いう通信が保守臭味の露国人に一
般に歓迎せらるるのは事実である、需用の在る所供給之
に従う。

二

ネミローウイチ、ダンチエンコ氏が東洋漫遊より歸ら

るるや、旧情を温め旁々かたがた一夕僕は氏をニコラーエフスカヤの其の宅に訪うた事がある。其の時既に先客があつて頻しきりに感心して氏の日本談を聴いている所だったから、僕も他人の興を妨げるでもないと思つて、挨拶が済むと、黙して矢張り氏の日本談を聴く身となつた。按あんずるに氏は決して雄弁家ではない、いや雄弁家の沈着を欠く。感じ早い氏の頭に驚くべき速力を以て僅少の時間内に弥いやが上うえ畳み込んだ日本の百千の印象が今其の一端を抓つまんで引越して見ると、ぞろぞろと釣し柿のように連つながつて際限なくめぐれて来るから、氏は殆ど始末に窮せられるらし

い。其結果狼狽せられる、で、今山の話をしていられるかと思うと、忽ち川の話になる。それもドブンと不意に川に陥ったように其話に移るので、聴手は一吋呆氣あっけに取られている中に、話は一蹶いつけつして向岸に躍り上ってしまふ事がある。

僕は氏の日本談に横槍を入れるどころでなかつた、流石さすがに意見ことを異にする点もないではなかつたが、それを言おうと口をむくつかせている中に。話が狂奔して別事に移るから、此方も喘あえぎ喘あえぎ走って其の尻しりに附く、なかなか口を開く暇がなかつたが、其の中にフト例の異人馬

鹿の話になった。

其の時ダンチエンコ氏は僕を顧みて、ニツコリして、
「この彼得堡ペテルブルグでそんな悪口を聞く事は無いでしょう？」
無論ないというだろうと予期していられたのだろう。
僕が有るといふと、眼を円まるくして、

「え、有る？……」

「有りますとも、不断の事だ！……」

「そ、そ、それは怪けしからん！ どんな悪口を？……」

それから僕は此の地着以来の経験を語った。

僕は元来散歩嫌いの男だが、ここへ来てから急に散歩

好きになつたのじやない、部屋の構造が冬向一方だから、
空気の流通が頗る宜よろしくないので、外出して比較的新鮮
の空気を呼吸せざるを得んだ。しかるに外出すると、
毎度悪口を言われる、外出の方面によつては、出る度たびと
いつてもよろしい。

人の面かおをじろじろ視て「支那人が通る」は無礼に相違
ないが、まず悪口の部には入れない。が中には凶星日本
人と看みて取とつて、ヤポーシカが通るといふ。ヤポーシカと
は我国の露助と同格で、日本人の賤称だ。複数だとヤポー
シキとなる。之をヤポンスキイと間違えて単に日本人

の事だと思ふ人が露語を知らぬ人に多いようだが、大間
違で、ヤポンスキイとは日本のという形容詞で日本人の
事でない、日本人の事は露語ではヤポーネツというのだ。

(明治四十二年三月十七・十八日)

日本文学電子図書館

露都雜記

著 者：二葉亭四迷

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系 1

「政治小説・坪内逍遙・二葉亭四迷集」

筑摩書房

昭和46年2月5日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館